

「こころを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 典礼・霊性部会

< 目次 >

1. お知らせ		5. 資料紹介	
被爆司祭「ルーメル神父」の講演会 2	被爆司祭の証言 7
広島地区献堂50周年実行委員会 2	6. 部会だより	
世界平和記念聖堂に関する情報提供のお願い 2	< 総務部会 > 8
2. 聖堂建設の歴史シリーズ		< 典礼・霊性部会 >	
「平和祈念祭」の挙行とラッサール神父の願い 3	< 平和活動部会 >	
3. 「ラッサール神父」の思い出		< 聖堂存在維持部会 >	
広島神冥窟における活動 4	< 記念誌部会 >	
4. 「献堂50周年を迎える祈り」		7. 献堂50周年の招き(概要) 8
今月の祈り 6		

「すべては、ここから、始まった。」



< 写真 1 >

幟町教会所蔵



< 写真 2 >

写真1 原爆で焼け残った幟町教会の正門。現在では、幟町教会の北門に見ることが出来ます。

写真2 大正12年当時の幟町教会の門柱(天主公教会の刻印は見えないが、門柱をつなぐ鉄の十字架は同じに見える。)

お知らせ

第2回「ルーメル神父」講演会

テーマ:

「世界平和記念聖堂建設とラッサール神父」

日時: 2004年2月22日(日)

・午前10時半~12時(午前9時半ミサ後)

場所: 世界平和記念聖堂

(広島市中区幟町4-42 幟町カトリック教会)

講師: クラウス・ルーメル神父

ルーメル神父さんは、昭和20年8月6日に広島市郊外にあるイエズス会の長束修練院で、被爆され、アルペ神父さんらとともに被災者の救援に尽くされました。ラッサール神父さんは幟町の教会で被爆されましたが、この時、ルーメル神父さんは長束から救出に向かわれた人達のお一人です。



(第1回講演会におけるルーメル神父 2003.12.13)

問い合わせ:

カトリック広島司教区

「世界平和記念聖堂50周年実行委員会」

tel (082) 221-0621

第2回広島地区実行委員会の開催

日時: 2004年2月22日(日)

午後0時~2時(ルーメル神父講演会後)

場所: カトリック会館1階多目的ホール

議題: 各部会の活動報告と今後の取り組み

情報提供のお願い

世界平和記念聖堂は、今年8月6日に献堂50周年を迎えます。広島司教区では、今年2004年を献堂50周年の感謝の一年とするとともに、「この聖堂こそ、精神文明の基点」にしたいと願ったフーゴ・ラッサール(帰化名「愛宮 真備」(えのみや まきび))神父の聖堂建設の遺志を継承・発展させたいと考えています。このため、聖堂建設当時の教会の様子や募金活動の取組み、献堂式の模様、献堂25周年の取組み、ラッサール神父の活躍、著作や禅に関する活動、その他平和記念聖堂を中心に行われた平和活動などについての刊行物や写真、パンフレットなどの情報を収集しています。各小教区の事務所や書庫、ご家庭にある古いアルバムや本棚などを見ていただき、情報をお寄せ下さい。

提出先

広島市中区幟町4-42 広島カトリック会館内
「カトリック広島司教区 世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 霊性・典礼部会」宛

提出方法

提供資料については、原則として、ご返却いたしません。ただし、その必要がない場合は、その旨、ご記入下さい。なお、ご提出いただく資料には、ご氏名と住所をご記入下さい。返却できなくなる場合があります。

問い合わせ

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

霊性・典礼部会担当 齊藤真仁神父

広島地区センター (082) 221-6698

豆知識

表紙の上にある平和記念聖堂のロゴマークは、平和祈念祭報告書の表紙にあったものをコピーしました。今もこのロゴマークが使用されています。募金活動の当時から、使われていたのです。

< 聖堂建設の歴史シリーズ >

昭和26年9月21日午後4時30分から広島平和記念聖堂の建設現場において「平和祈念祭」が執り行われました。その式典の様子は、平和祈念祭報告書で伺い知ることが出来ます。わずか12ページのB5版パンフレットですが、建設基金の募集に当時の関係者の意気込みを感じ取ることが出来ます。

この平和祈念祭の主催は、広島平和記念聖堂建設後援会となっています。後援会の事務局は、広島と東京、大阪に置かれていました。広島は幟町の広島カトリック教会内、東京は上智大学内、大阪は商工会議所内に事務局がありました。表紙には「名誉総裁高松宮殿下御成り」という文字とともに、高松宮様のご挨拶をされている写真が掲げられています。この時には、聖堂の屋根が架かっておらず、青空の下で式典が行われました。このほか、時代の背景を知る上でも貴重な資料です。読みづらいかもしれませんが、当時の雰囲気伝えるため、旧字体のまま、紹介します。なお、この時点では、世界平和記念聖堂ではなく、広島平和記念聖堂と称していました。

= 世界平和は広島から =

高松宮殿下と共に静かに世界平和を祈る

昭和二十六年九月二十一日

広島平和記念聖堂建設現場で

広島平和記念聖堂建設後援会名誉総裁高松宮宣仁親王殿下には、第六回国民体育大会夏季大会開會式に御臨席のため、九月二十日午後三時、品川駅より一路宮島口駅に御到着、直ちに宮島海岸で開催の全日本ヨット競技会開會式に御臨場、続いて翌二十一日午前八時三十分、呉市営プールにて開催の全日本水泳大会開會式に臨ませられ、旧呉海軍施設とセーラー万年筆工場を御視察の後、午後四時三十分、呉、広島間海岸線国道を自動車にて広島市幟町の広島カトリック教会構内に建設中の広島平和記念聖堂建設状況御視察のためサビエル記念館^(注)に御到着遊ばされた。これより先午後四時三十分より広島平和祈念聖堂建設現場に於て開催される平和祈念祭に参會した清心中學校生徒を初め、約壹千名の市民

は、高松宮殿下を御奉迎申上げるために会場前の幟町道路に整列し、予定通り御到着の宮殿下をお迎えして会場にて平和祈念祭の開會を待った。

サビエル記念館にて御少憩の宮殿下は、ラツサール神父の御紹介にて広島教区各神父に面接され御休憩約十分、初秋快晴の下、平和の鐘鳴り続ける中を午後四時四十分、ラツサール神父と土井後援會広島事務局長の先導にて平和祈念祭祭場に臨ませられた。

高松宮殿下祭場に一步足を印せられるや、エリザベト音楽學校々長ゴージェンス神父の指揮による「君が代」の莊重なる奏樂の音と共に、世界平和を祈念せんがために参列した壹千余名の市民は總起立して「君が代」を合唱しつつ宮殿下の御着席を、御待ち申上げた。

第二次世界大戦終戦以来滿六年を經過せるに拘わらず、民主、共産國家群の冷い戦争は愈々激化し、朝鮮戦線一年半に亙る戦闘と言ひ、或は又、東欧、バルカン、アジア南方諸地域に於ける紛争は、何時再び第三次世界大戦を誘発するやも計られぬ一觸即發の危機をはらんでいるこの秋に於て戦争の惨害を身を以て体験した広島市民が、心から世界平和を祈る。然も高松宮殿下と共に、或は高く或は低く聖歌のみなざる平和記念聖堂にひざまずいて静かに静かに世界平和を祈る。

世界平和を祈る市民や信徒のまごころは、司祭の讃える降福式讃美を唱和し、司祭のたく香煙と姉妹の歌うさわやかな聖歌と共に、未だ出来やらぬ天蓋の七十尺の聖堂内を、初秋の青空に、全世界の空へもなびけよと、流れるともなく行く水のように全世界におし擴つてゆくであらう事を堅く信ずる。心から静かに平和の来る事を祈り続けるまごころは、また崇高な喜びの静寂そのものでもあつた。

(以下、次号において、同資料にあるラツサール神父の挨拶文を紹介します。)

(注) サビエル記念館は、幟町教会の敷地の南西の角にあった、木造2階建てのホールで、現在のエリザベト音楽大学のセシリア・ホールの位置にありました。

<ラッサール神父の思い出>

「愛宮真備師と広島神冥窟」

金澤文雄(廿日市教会)

〔まえがき〕

広島日独協会名誉会員でもあられた愛宮真備(ドイツ名フーゴー・ラッサール)神父が1990年に92歳でドイツ滞在中逝去された。このたび神父の伝記がイエズス会の事業として作られることになり、その担当者として昨年12月¹ウィーン在住のウルスラ・バーツ女史が来日され、上智大のクラウス・リーゼンフーバー先生を通じて「広島神冥窟」について私にインタビューをしたいと申し込んでこられた。あいにくその時私は病氣入院中でお受けすることができなかったので、代りに当時のことを思いつくまま日本語で書いて上智大の方へお送りした。以下は、それをそのまま嶋屋節子先生のおすすめにより会報に寄稿させて頂いたものである。

1954年(昭和29年)4月、私が仙台の東北大学から広島大学講師として着任したとき、フーゴー・ラッサール神父(Hugo Lassalle S.J.)は、すでに1948年に日本に帰化され、愛宮真備(えのみや・まきび)という日本名を名のっていられた。

「愛宮」の姓は、文字通りに神を愛するという意味であるが、これは広島古名「埃宮(えのみや)」からとったものであろう。日本書紀(AD720)の中に神武天皇東征のさい安芸国(あきのくに)の「埃宮」に行在所(あんざいしょ)を設けたと記されている。埃宮の位置は現在の広島市の中に独立の自治体となっている安芸郡府中町(ふちゅうちょう)附近とされている。

「真備」は、奈良時代の大学者で唐の文化を持ち帰った吉備真備(きびのまきび)(695-775)からとられたようである。1960年代のいつ頃かは忘れたが、岡山県吉備郡真備町(まびちょう)が吉備真備の記念碑を建立したさい、愛宮神父が式典に招かれたことがあった。

愛宮師の原爆被災については、ジョン・ハーシーの「ヒロシマ」(John Hersey, Hiroshima, NY1946, 石川欣一・谷本清共訳・法政大学出版局1949年)にもかなり詳しく述べられているように、全身に重傷を負われたにもかかわらず、広島復興のために超人的な活動をされたのである。

愛宮師の禅の研究と実践は当時すでに広く知られており、カトリック教会の高位聖職者の間には異論の声もないではなかったようである。師の著書「禅一悟りへの道」H.M. Enomiya-Lassalle S.J., Zen - Weg zur Erleuchtung, Herder Wien1960, 池本喬・志山博訪訳・理想社1967年)の「訳者あとがき」によれば、愛宮師が参禅を始められたのは1943年津和野の永明寺での参禅会であり、1954年に世界平和記念聖堂完成の後、1956年から福井県小浜市(おばまし)の発心寺(ほっしんじ)で原田祖岳老師(1871~1961年)の許に参禅し本格的な修業を積まれた。愛宮師の最初の動機は日本的靈性の真髄を理解したいということであったが、間もなく、座禅はキリスト教的修徳と神秘への一つの道として非常に役立つことを確信するに至った。師の熱心は非常なもので、ある時、交通事故にあわれ脛骨が露出するような大怪我をされたときにも大聖堂の地下聖堂などで座禅をくんでいられる姿が目撃されている。

信者の間では冗談に、「大聖堂には三人の『トリ』がいる。広島教区長の荻原晃(おぎはら・あきら)神父様はいつも熱心に庭の『草トリ』、愛宮神父様は『サトリ』、エリザベト音大の小出哲夫(こいで・てつお)神父様は『サントリー』(日本の代表的ウイスキー名)」などといわれていた。これは小出神父自身が言い出された冗談のようであるが、このお三方とも、それぞれ性格は全く異なるが、実に偉大なキリストの宣教者であり、神秘家であり、大学者であられたと今にして痛感している。

さて、愛宮師は愛用の古くて重いドイツ製のオートバイを駆って、多くの信者や被爆者の世話に走りまわり、私も時々後部に同乗してお伴をさせて頂いた。その間に、御自分の座禅堂を建てるすばらしい場所を発見された。それは広島市から北の中国山地に20キロメートルほど入った広島県可部町(かべちょう)の南原峡(なばらきょう)である。そこ

¹1993年(编者注記)

は標高七、八百メートルの二つの山の鞍部を源流とする断層溪谷で大小の瀧や巨岩があり、落葉広葉樹が繁茂し、シヤクナゲやヤマツツジの自生する景勝の地である。後に1967年広島県立南原峡自然公園に指定された。その峡谷の入口から四、五百メートル登った左側の森林数千平方メートルをエリザベト音大の施設用に購入し、1961年の初頭の頃だったかと思うが、広島島の「神冥窟」を建てられたのである。信者の北村設計事務所が設計施工し、40坪ほどの座禅堂と近くに十数名位泊れる宿舎を建てた。座禅堂としてはやや異例の全面畳敷きで中央登壇を設けており、玄関は当地の巨石を用いて、窟つまりいわやの感じを出している。当時は人の出入りはほとんどなく、樹々をわたる風の音と谷川のせせらぎが聞こえるだけの静寂の地であった。

神冥窟という名前は、愛宮師自身が考えぬいてつけられたものであるが、私たちにもどんな名前が良いかはじめから相談された。神冥窟は、完全な自己離脱による悟りと共に、さらにそれを超えて靈魂の暗夜を通過しての神愛の超越的神秘へ至るという意味をもつものと解されていたようである。

そこで広島のカトリック信者十数名を中心に師の指導の下に参禅会が作られ、毎月一日だけの座禅と年に数回の五日～七日間ほどの接心が行われるようになった。

座禅のやり方は、座り方、呼吸、経行(きんひん)、独参、食事など伝統的方式に従って行われた。当初は参加者の多くは足の痛みや苦しみに、沈黙の行に苦痛を感じていたが、回を重ねるごとに、とくに接心会に参加するとあるていどの潜心にまで至るようになり、全くの初歩にもかかわらず、その効果は心身ともかなり顕著なものがあるように思われた。

精神面では、早朝ミサから始めて夜の祈りに終ることに示されているように、仏教的要素は全くなく、キリスト教的精神に貫ぬかれていた。ただ、キリスト教的修徳の通常の方法である黙想と全く異なるのは、理性も感情もすべてを滅却して「無」に徹するということである。しかし、その方法として「公案」というものは用いられなかった。

師によれば、悟りは、自己を完全に離脱することによって存在そのものと一体となるという自然的

神秘体験であり、悟りそのものは目標ではなく出発点であるという。キリスト者が座禅をする目標は、この方法を通じて、十字架の聖ヨハネのいう注賦的観想の超自然的恩寵を頂く準備をすることであり、そして神愛の実践に徹底することであるといわれていた。

接心の間は全員が泊りこみ、炊事(禅寺では典座(てんぞ)という)は私の家内(金澤須和子)が一人で担当した。ある時、家内が食糧を運ぶ途中いのしし狩りに遭遇し、撃たれたいのししを見て驚いたといていたことがあった。神冥窟の存在は次第に広く知られるようになり、カトリック信者以外の人や本物の禅宗のお坊さんまで接心に参加されることもあった。広島市の見真講堂(けんしんこうどう)で沢木興道(さわき・こうどう)老師の高弟として有名な弟子丸泰山(でしまる・たいせん)老師と愛宮師との講演会を催したときは、満員の聴衆は東西の靈性の交流に深い感銘を受けた。

1962年から64年まで私はフンボルト財団留学生として家内とともに西ドイツのケルンに滞在し、愛宮師も62年に始まった第二バチカン公会議に日本司教団に随行され、ドイツへもたびたび来られ、講演や座禅の指導をされ、ケルンの私共の家にも訪ねて下さった。

神冥窟の周囲は広葉樹林の斜面で地下水が湧き湿気が多く、床板や畳や屋根などが傷んで早くも老朽化しはじめた頃、中国電力が、この地に揚水式発電のための「南原ダム」を建設することになり(1972年着工76年運転開始)、神冥窟もとりこわされることになった。たまたまその用地買収の会社側担当者は私のかつてのゼミナール生で、いろいろ便宜をはかってもらった。

愛宮師が広島を去って東京へ移り、都内の秋川に「秋川神冥窟」を作るという計画を伺い、私たちも協力することとし、師が永年貢献された広島県宗教連盟の世話人方とも相談し、当時の広島商工会議所会頭もつとめられた河村郷四(かわむら・さとし)氏を会長とする秋川神冥窟建設後援会を作り、相当な金額の寄付金を集めて頂いた。これもひとえに師の人徳によるものである。

1967年の秋頃、広島市渉外課長の小倉薫(おぐら

かおる)氏から山田節男(やまだ・せつお)広島市長が師の離広の記念に何かお礼をしたいという意向が伝えられ、広島市名誉市民ではどうかということになり、私が師の業績を述べた文書を作成して市長に提出させて頂いた。(この件については愛宮師に事前に全くお知らせしなかった。)その後、市議会の賛成を得て1968年(昭和43年)4月1日付で名誉市民として顕彰された(広島市報264号昭和43年4月15日)。

師は東京へ移られてからも毎年8月6日の原爆忌には必ず来広され、大聖堂で説教を行われるのが常であった。1981年2月25日ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世御来広のさいにも案内役として同行された。

師の多方面にわたる御貢献については、ここで述べる余裕はないが、師の教誨師としての活動の一端を記しておきたい。神冥窟の名前を相談していた頃、幟町(のぼりまち)教会の聖母会の集りの時、一枚のうすずみで描いた聖母子像を示され、この絵を書いた人をどう思うかときかれた。その人は精神病院にいる人か死刑囚のような気がしますと私がいうと、その通りで、実は広島拘置所で死刑判決が確定したYという青年が描いたもので、愛宮師から洗礼を受けたいといっており、もう一人の死刑囚もYのすすめで受洗を望んでいるということであった。そんな縁で私がY君の代父となり、潮見公安(しおみ・きみやす)さんがもう一人の代父となって師による洗礼に立会った。この第二の人は間もなく大阪拘置所へ送られ、すぐ執行されたが、信者としての立派な最後であったことが手紙や手記で知らされた。Y君の場合は、裁判官が犯罪の情状を誤解した結果生じた誤った死刑判決で、私は知友の椎木緑司(しいのき・ろくじ)弁護士にたのんで再審を請求したが、結局だめで、1971年秋に処刑された。私は拘置所長の依頼により処刑前日から長い時間を共に過し、処刑そのものにも立会った。この人の最後もまた実に立派なものであった。所長や職員にも心からの感謝の言葉を述べ、従容として死についた。この人は拘置所中にすでに長い煉獄の苦しみを経ており、自分の罪の何倍もの償いを果して帰天したと私は確信している(この人については、ホセ・ヨンパルト師

が「こんなに素晴らしい人がいる!」中央出版社1991年の中で紹介している)。私は、現在、確信的な死刑廃止論者の刑法学者の一人であり、それは人間の尊厳と人権を実現するために是非とも死刑廃止が必要であることを理性的に確認したからであるが、Y君とのかかわりが一つのきっかけになったことは否定できない(参照、金澤文雄「死刑廃止への提言」法の理論12・成文堂1992年)。

広島を去られてから愛宮師の禅とキリスト教の研究と実践は、益々深くかつ活発なものとなり、東と西の世界の霊性をかねそなえた神学界の高峰として全世界的に認められるようになった。師の80歳の誕生日を祝して、世界の哲学・神学界の碩学が寄せた浩瀚な祝賀論集「無念無想一無対象的冥想、愛宮ラサール神父第80回誕生日祝賀論集」(MUNEN-MUSO-Ungegenständliche Meditation,Festschrift für Pater Hugo M.Enomiya - Lassalle S.J. zum achtzigsten Geburtstag, Mainz1978)を見ても、師に村する評価がいかに高いものであるかが分かるであろう。

(広島日独協会 会報 第40号 平成5年3月 7~11 ページより抜粋)



参禅の様子(幟町教会 秋元さん提供)

世界平和記念聖堂献堂50周年を 迎える祈り

世界平和記念聖堂の鐘楼の壁面にある聖堂記には、「この聖堂を訪れ、ご覧になるすべての方々は、亡くなられた犠牲者の永遠の安息と人類相互の恒久の平和のためにお祈り下さい。」と刻まれています。

献堂に先立ち、1951年(昭和26年)9月21日の平和祈念祭において、ラッサール神父は、この聖堂が「原爆や戦争の犠牲者の慰霊」、「慰霊の祈りが全世界の心ある人々を引きつけて平和運動を強化してゆくこと」、「真の平和のために精神文明の基点とすること」の三つの意義を話されています。

献堂50周年を迎え、私たちは、このような崇高な建設の意義を再確認し、「キリストの平和」の実現のために、神の祝福が豊に与えられるよう、こころを一つに共に祈りましょう。

聖堂50周年を迎える祈りは、毎月6日を「ヒロシマ平和の日」として捧げ、それぞれの家庭や小教区で地域の実情に合わせて取り組んでください。

また、世界平和記念聖堂についての十分な情報がない人や小教区のために、毎月の「祈りの意向」を、お知らせします。それぞれの家庭や小教区で、これらの意向や資料を参考に、手作り感覚で取り組んでください。

【今月の祈り】

2月の意向 ヨハネ・パウロ2世の平和の取組みにならうことが出来るよう祈ります。

「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことだ。」というあなたの強い確信に基づいて広島に巡礼されました。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」という真理を伝える場として広島を選ばれました。広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を振り返ることは平和に対して責任を担うことですというあなたの訴えを素直に聞き入れ、正義に従

って平和をつくることをお互いに誓うことが出来ま
すように。(広島平和アピール)

(聖書の言葉)

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、
わたしの道はあなたの道と異なると主は云われる。」
(イザヤ 55・8)

(黙想)

(祈り)

「彼らは、その剣を打ちかえて、鋤とし、その槍
を打ちかえて、鎌とし、国は国に向かって、剣をあ
げず、彼らはもはや、戦いのことを学ばない。」と
いう預言者の言葉に耳を傾け、私たちの力を無限に
超える神の力を受けて、強くなることが出来ますよ
うに。また、神が我々を一致するよう招いておられ
るとおり、一つになりますように。愛と自己を分か
ち合うことが、はるか彼方の理想などではなく、終
わりなき平和、神の平和に通じる道であることを気
づくことができますよう。

被昇天の聖母に捧げられた世界平和記念聖堂によ
って、数多くの人々が本当の、そして深い心の平和を
見つけ、世界平和の礎(もと)になりますように
アーメン



広島平和資料館バルコニーのローマ法王と野口司教

資料紹介

「戦争は人間のしわざです。」

— 教皇来行10周年記念被爆証言集 —

カトリック正義と平和広島協議会編

(1991年2月25日発行)

(A5版 263ページ)

< 内容 >

- ・ヨハネ・パウロ2世「平和アピール」
- ・宣教師の見たその日(司祭の被爆証言)
- ・死の街をくぐり抜けて(信徒の被爆証言)
- ・世界の平和を祈って(ラッサール神父などによる世界平和記念聖堂の建設経過)

部会報告

< 総務部会 >

実行委員会の運営方法について、部会を開きました。また、8月5日に予定している献堂50周年感謝ミサの招待者のリストアップ、会計、予算など裏方の仕事を行っています。

< 典礼・霊性部会 >

ヨハネパウロ2世の「世界平和の日」メッセージを読む会を行いました。カトリック教会の「平和」について、理解が得られるよう、引き続き「平和の使徒推進室」と連携して、このような催しを開きたいと思います。

< 平和活動部会 >

平和活動の具体的な取組みについて部会を開きました。建設当時の証言集めや、ラッサール神父の紹介などを行ってゆくことが話し合われました。

< 聖堂存在維持部会 >

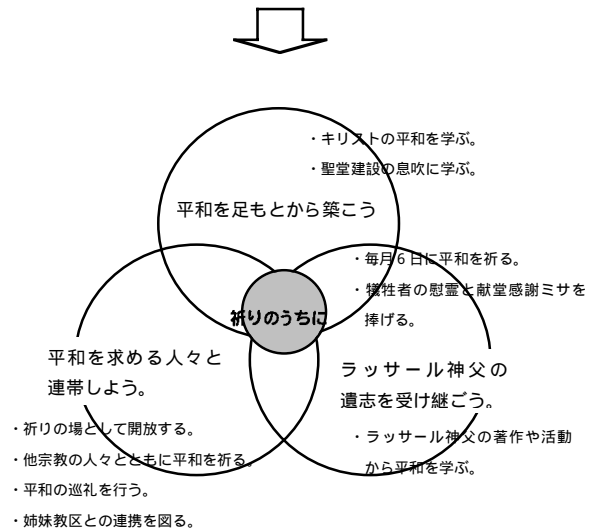
これから教区全体で記念聖堂の維持が図られるよう、具体的な方策などを検討してゆきます。

< 記念誌部会 >

50周年を機に、聖堂建設に関する資料の整理、記念誌の編纂を行いたいと思います。他の部会と連携して、準備を進めたいと思います。

献堂50周年の招き(概要)

「世界平和記念聖堂50周年を祝う準備に取りかかろう。」との司教メッセージに応えて



< 編集後記 >

- ・世界平和記念聖堂献堂50周年が1月からスタートしましたが、ニュースの発行が2月になってしまいました。
- ・教区の献堂50周年実行委員会は、昨年9月14日に発足したのですが、実際の働き手が少なく、準備に時間が掛かってしまいました。
- ・50年という時間は、人々の記憶を薄れさせます。広島では、被爆から59年を経ても、被爆の実態が風化しないよう努力が続けられています。この聖堂も世界平和を願う人々のシンボルとなるよう永くこれからの若い人に伝えていきたいものです。(K.A)

献堂50周年ニュース

vol.01 創刊号(No.1)

2004.02.07 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

霊性・典礼部会 斉藤 真仁神父

〒730-0016 広島市中区幟町4番42号

Tel 082-221-6698

<http://hiroshima.catholic.jp/>